



## Profile

学習院中等科教諭を経て1999年から学習院大学助教授、2007年に准教授、2009年に教授。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、博士（人間科学）。専門は教科外教育（特別活動、部活動、ホランテニア学習、シテイスンシップ教育など）。日本部活動学会会長、文化庁「文化活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議」座長。

## ● 自著を語る ● BOOK

『部活動改革 2.0  
文化部活動のあり方を問う』

中村堂 2160円  
☎03-5244-9939



学習院大学教授

**長沼 豊** / Yutaka Naganuma

## 持続可能な部活動への 処方箋を探る

### 文化部活動にもスポットを

本書で問いかけたかったのは「部活動の『持続可能な形』とは何か」という点です。教員や生徒の部活動の過重負担を改善する動きが進む中、今後、学校に部活動を残すのであれば、その教育的意義を明確にしていくなが必要があるからです。

とくに文化部活動は、運動部活動に比べて話題になることが少なく、スポットライトを当てたい気持ちもありました。そこから各地の多様な取り組みの中から持続可能性を持ったものを抽出しようと考えました。

文化部活動は吹奏楽や合唱、演劇だけでなく、多岐にわたります。本書では「競技かるた部」や「郷土芸能部」「マーケティング部」などの実践者に執筆を依頼しました。また、部活動に課題を感じて発信している現役中学生の保護者、教育史研究者、小学校長など、実践者と研究者がコラボした一冊になりました。読めば文化部活動の幅広さが分

かるようになっていきます。

### 答えは一つではない

誤解のないように言っておきますが、私は部活動が大好きです。中高時代はバスケットボール部と文芸部に所属し、教員時代は三つの部活動の顧問を担当しました。部活動に打ち込む生徒や先生の気持ちもよくわかります。しかし、その一方で部活動に苦しさや辛さを感じる先生や生徒もいるのも事実です。感情に走らず、建設的な意見を打ち立てていくことが必要です。

今後の部活動のあり方について、答えは必ずしも一つではないでしょう。学校で部活動を行う地域、外部化する地域、拠点校を設けて、合同で行う地域などいろいろなた姿が現れてくると思います。そもそも部活動は生徒の自主的、自発的な活動が出发点です。あり方も多様性に富んでいていいのではありません。**部活動のパラドックスを自覚**部活動と同様に、自主性・自

発性を特性とする活動に「ボランティア」があります。私の研究分野でもあるので両者の類似性についても考察しました。

ボランティアは、自主性・自発性を出发点としますが、ひとたび形が出来上がると、いつの間にか義務的なものに変容してしまうパラドックスに陥りがちです。それを防ぐには、自主性・自発性がはらむ「弱点」を自覚し、「振り返り」を欠かさないことがボランティアの世界では常識となっています。

部活動も同じです。教員も生徒も一生懸命に取り組むのはよいのですが、それが義務や強制、独善的な部活動運営といった「弱み」に直結しがちです。「部活動は生徒指導に有益だから全員入るべき」という信念も見直す時期にさしかかっています。管理職の先生方はご自身の経験からではなく、今の若い先生や子どもたちと、あるべき部活動の姿を話し合い、新しいスタイルの「持続可能な」部活動を探ってみてはどうでしょうか。